

フォトゾフィオ応募書類

01 作家名 石崎幸治 (いしざきこうじ)

自己紹介文・経歴

写真家、エッセイスト、イラストレーター 1947年東京生まれ。74歳。1971年早稲田大学商学部卒。在学中早稲田大学写真部に所属し卒業後フリーのカメラマンになる。主に新聞社や出版社の依頼で撮影をする。その後旅行記を書いたことがきっかけでエッセイも書くようになる。また水彩画と焼き物も45歳のときに始め公募展で入選している。

単行本 「名城発見」KKベストセラーズ、「桶屋一代江戸を復元する」筑摩書房、「石畳あみのバッグと小物」日本ヴォーグ社、「稲城三十六景」インターメディアリー この本は随筆、写真と挿絵を全て制作した。

公募展 2010年団地景観フォト&スケッチコンテストカレンダー賞 2013年第9回千修イラストレーションコンテスト ソトコト賞 2015年環境フォトコンテスト環境大臣賞と環境フォト大賞 2016年JMPA WEBフォトコンテスト受賞 2017年第42回JPS展入賞 第65回ニッコールフォトコンテスト受賞 2018年ファーレ立川アートフォトコンテスト入賞 第71回創造展陶芸部門入選 2020年第3回サイエンスフォトコンテスト最優秀賞 2021年JMPAインターネットフォトコンテスト入賞

02 制作の動機

新しい写真を求めて

私が物心付いたときは 35 mm フィルムのカメラが一般に普及した時代だった。カラー写真を撮ってもらったのは 60 余年前で写真に色が付いたと大いに驚いた記憶があります。その後大学生のときに写真に興味を持った。大学卒業後は写真を撮ることを職業に選んだので雑誌社の編集部の意向に沿った写真ばかり撮影して自分の作品を撮る機会がなかった。

世の中の雑誌もほとんどがカラーページになり、ポジフィルムの撮影にはそれなりの知識と経験が求められた。確実に良い写真を提供することができるだけで当時は仕事が舞い込んできたものである。1900 年代にデジタルカメラが出現し、性能はフィルムカメラに当分間及ばないと思っていたら 2005 年にデジタル一眼レフを購入せざるを得なかった。印刷がフィルムからデジタルデータに変わったからである。

デジタルカメラになったらフィルム代と現像代が不要になり、且つ撮影結果がすぐに確認できるようになった。その結果、写真を撮ることが特別な技術でなくなってしまった。今やスマートフォンで撮影した画像をすぐにネットで発信できる。そんな時代だからこそ珍しい瞬間を切り取るだけでなく撮影者自身の美意識と確固たる視点が求められるのだと思う。

03 組写真のテーマの説明

人は何故写真を撮るのでしょうか。わたしの場合は見たものを長く記憶に留めておけないから写真を撮ります。子供の成長や旅の思い出を写真で記録してきました。写真には撮影したときの情景をまざまざと思い出さす力があります。記録以外に自分が面白いと感じたことを人に伝えたいと思って写真を撮ります。

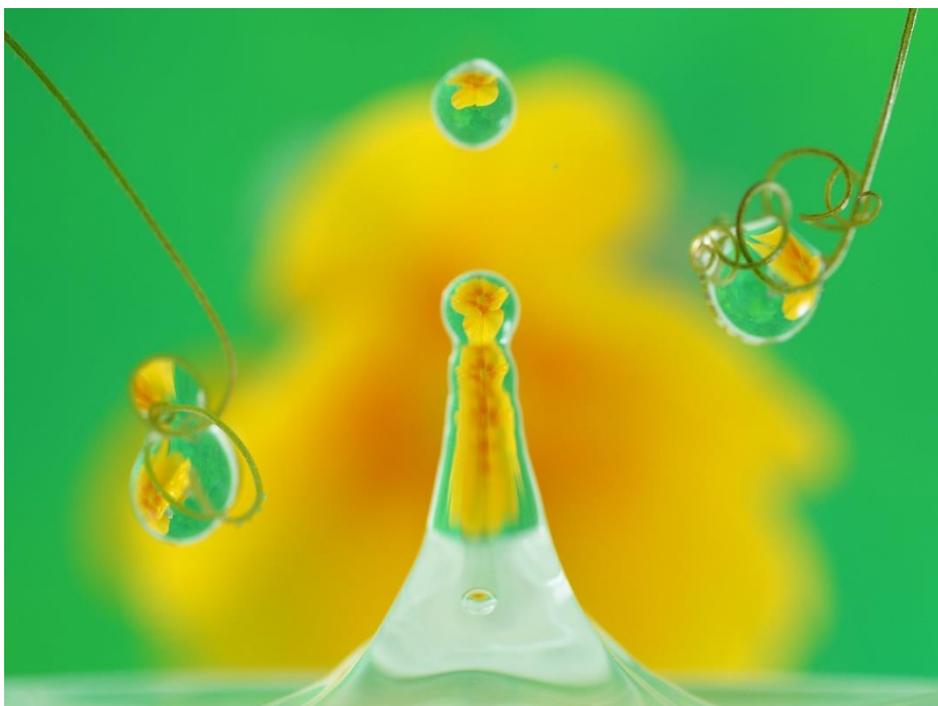
写真を見たときに撮影したときの現場の様子が見る人に伝わる写真が良い写真だと信じられています。写真が瞬間芸術といわれるように撮影者は広い自分の視界の一部をこれぞと思ったときにカメラという道具で四角く切り取ります。フレームに収める美的感覚や光線の捉え方や瞬発力がないと上手くいきません。

私は出会ったものを切り取るのではなく、スタジオ撮影のように被写体もライティングも自分で設定して誰もが不思議や美しいと思う唯一無二の写真の世界を創り出したいと思っています。跳ね上がった水滴の中に景色が写ることに気が付いて、装置を自作して合成でなく1回のシャッターで撮影しています。水滴の中に写る花にピントを合わせるのに苦労しました。

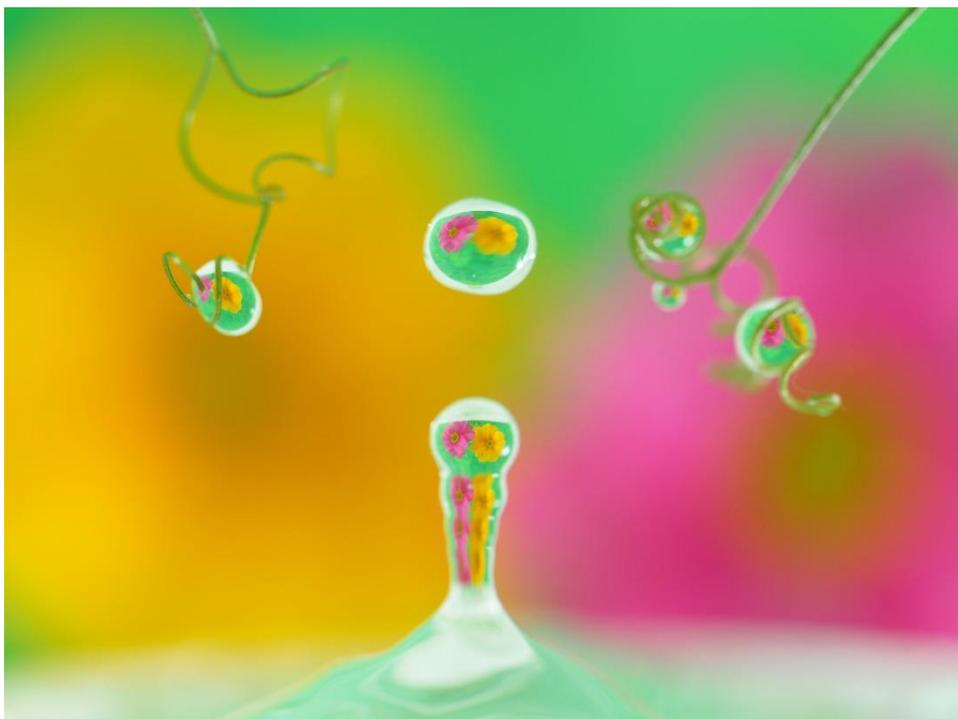
04 作品画像と題名

「重力と表面張力が作り出す世界」

作品 01



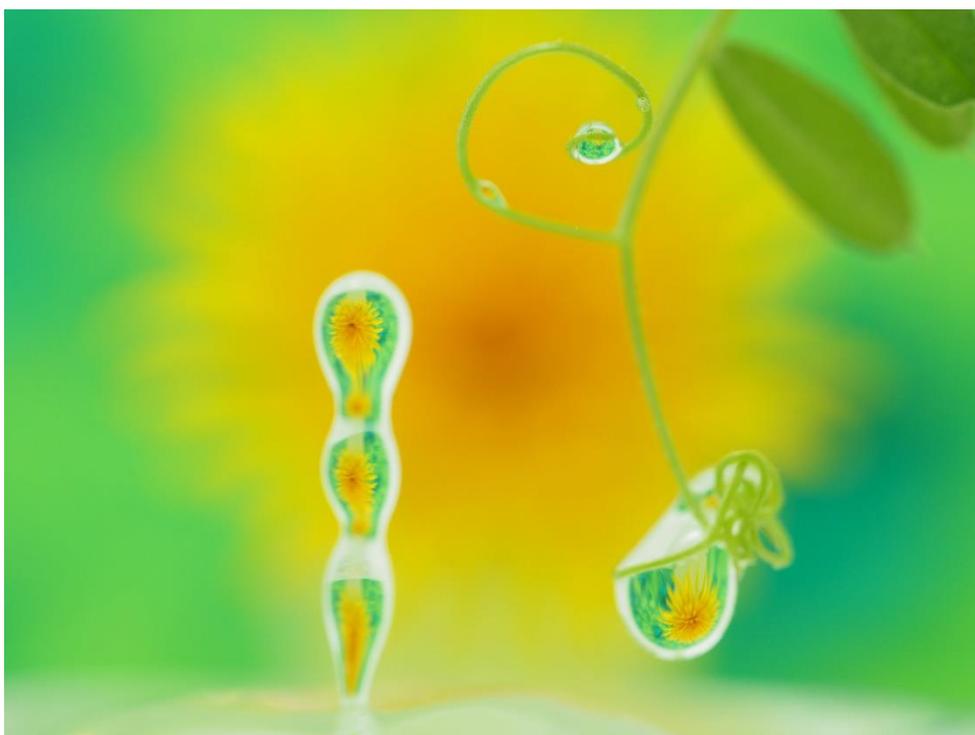
作品 02



作品 03



作品 04



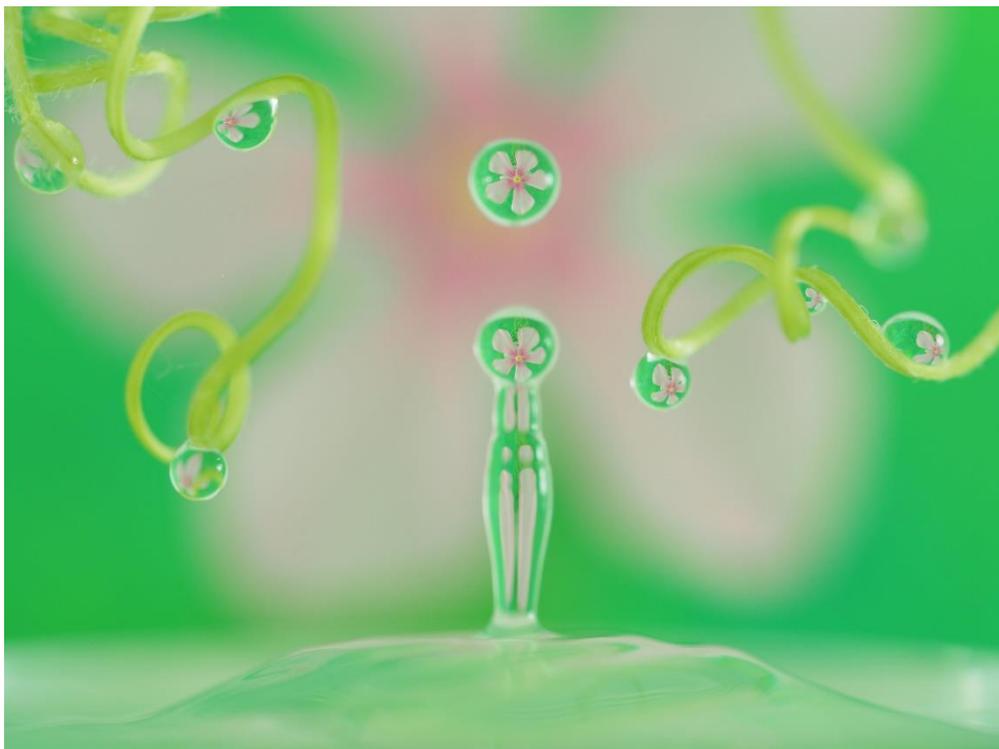
作品 05



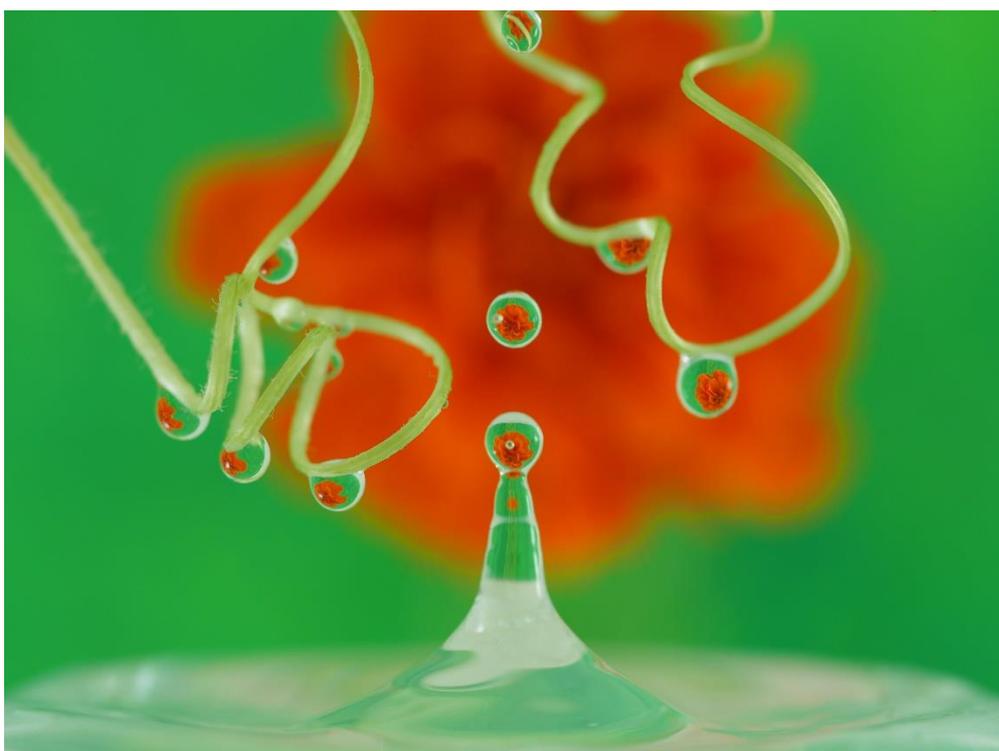
作品 06



作品 07



作品 08



作品 09



作品 10

